

# 絶対的必然主義としてのスピノザ形而上学 —知性と表象の区別—

吉田 健太郎

社会科教育講座（哲学）

## Spinoza's Metaphysics as absolute Necessitarianism: The Distinction between Intellectus and Imaginatio

Kentaro YOSHIDA

*Department of Social Studies (Philosophy), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

### はじめに

スピノザは単に決定論者というよりはむしろ必然主義者だと言われることがある<sup>1</sup>。その根拠となる叙述を『エチカ』から引用してみると、

「神の本性の必然性から無限に多くのものが無限に多くのしかたで、言いかえれば無限知性によって把握されうるすべてのものが、生じなければならない。」（1部定理16）

Ex necessitate divinae naturae, infinta infinitis modis (hoc est, omnia, quae sub intellectum infinitum cadere possunt) sequi debent.

「自然のうちには一つとして偶然なものがなく、すべては一定のしかたで存在し作用するように神の本性の必然性から決定されている。」（1部定理29）

In rerum natura nullum datur contingens, sed omnia ex necessitate divinae naturae determinata sunt ad certo modo existendum et operandum.

「事物は現に産出されているのと異なったいかなる他のしかた、いかなる他の秩序でも神から産出されることができなかった。」（1部定理33）

Res nullo alio modo, neque alio ordine a Deo produci potuerunt quam productae sunt.

たしかにこれで見ると、私がいま論文を書いていることも、単に先行する諸条件によって決定されているというよりは、そのようにあることが無条件に必然であること、別のしかたで行動することが絶対的に不可能であったこと、のようにスピノザが主張していると受け取れる。果たしてスピノザの主張を文字通りに受け取るべきなのか。スピノザの必然主義に対しては、それを文字通り無条件的なものとするのではなく、有限的個物間の因果

系列に関しては、スピノザは「別の可能性（可能世界）」を認めているとする解釈<sup>2</sup>もある。

本論文での筆者の主張は主として次の3点である。有限な人間精神は、無限なる神の本性について、無限知性とまったく同じ理解をもつこと。スピノザ形而上学が「知性の秩序」にもとづいて展開されている以上、絶対的な意味での必然主義の立場でしかありえないこと。神の本性の必然性とは、「あらゆるものがあらゆるしかたで産出される」という現実の唯一なる形式の必然性のことであるということ。

## 1. 神についての十全な理解とは

### 1-1

スピノザに即して、無限なる神の視点から神自身の存在について語るとすれば、「自らがあらゆる状態に変状 affectio しながら存在していることを、自らの身をもって、あらゆるしかたで表現していること」ということになるだろうか。あらゆる状態のうちには、もちろん思考状態も含まれるので、思考状態が他の状態、たとえば身体的運動状態より一段上位なるものとして特別視されているわけではない。身体的運動状態について思考している精神が、思考状態とは別に実体的に存在しているのでもない。また、神が身体的に活動することは、神が思想的に活動することと全くの並行関係にあるので、思考活動とは自らに対応する身体的活動を対象とする活動だということになる。さらに、思考状態を含む自らのあらゆる変状について、自ら知っていることも含まれている。

人間の思考活動であれ物理的自然の諸活動であれ、この自然界のすべての事物、事象、出来事は、唯一なる神の変容状態であるとスピノザは考えている。いずれも神の変状にすぎないので、そのものとして永遠に存在することはできない。何かの変状であるということは、実体的に存在する何かの様態であるということであるから、人間や宇宙がその状態であるところの実体が存在しないことには、そもそも変状として存在することはあり得ないことになる。人間身体が存在とは独立に歩行活動が存在しないように。そうは言ってもしかし、歩行が人間身体の様態の変状だというのはなら分かるが、人間身体が、まして宇宙が神の変容状態だと言われても即座に納得がいかないかもしれない。人間が神の変容状態であることはどのように理解すればよいのか。神が人間に変容するとはイエスが神の子であるように、すべての人間は神の変わり種だと言いたいのだろうか（そうではあるまい）。

神のあらゆる変容の一つに当然、思考活動も含まれるわけだが、そもそも神が考えることをどう理解すべきか。人間が考えているのと同じしかたで神も考えているのだろうか。人間は神の変容（人間に変容する限りでの神）だとすれば、考えているのは人間なのか、それとも神自身なのか。人間の思考は結局のところ神の思考の反映にすぎないということなのか。ところでスピノザによれば、思考活動は神の絶対無限なる本性から必然的に産出されたものである。神から産出されたもの（所産的自然 *Natura Naturata*）なので、いかなる思考活動も実体ではなく様態的存在である。したがって、神の無限知性といえども実体としての神そのもの（能産的自然 *Natura Naturans*）に属するのではなく、あくまで神によって産出されるかぎり、神の様態にすぎない。無限知性とは、無限なる神の本性を無限なる認識活動というしかたで表現している、神の変容ということになる。それゆえ、無

限知性という能力主体が個々の知性活動を産み出していると捉えてはならない。無限知性であり有限知性であり、それらは思考活動の主体ないし実体ではなく、神の本性を思考活動というしかたで表現する、一つの様態にすぎないのである。

ちなみに人間精神は、人間身体を対象とする思考様態であるから、人間身体の観念に等しい。つまり様態的存在にすぎない。精神は思考活動の主体として存在するのではない。また、精神は現に活動している思考状態であるから、能力でもない。観念にしても、思考活動なのであって表象像 *imago*<sup>3</sup>のごときものではない。また人間知性とは、人間精神の本質に変状するかぎりの神であったが、「本質」とは「自己の何であるか」を規定するものであるから、自己の本質からは自己以外の他のものとの関係について何もかも帰結してこない。たとえば三角形の本質の理解には、三角形それ自体の固有特性についての理解が含まれるとしても、三角形が具体的にどの時間にどの場所で誰によって思い描かれるかについて、何らの規定も含んでいない。したがって有限な人間知性は、自己自身の本質については十全に理解するが、個物間相互の共通本性の理解には関与しないということになる。共通本性の理解はあくまで「理性」による<sup>4</sup>。それゆえ無限なる神の側から見れば、神からの産出についての自己理解は、すべて「知性」であるほかはない。神は外部をもたないので唯一なるものであるから、神には共通なるものがないのである。

## 1-2

スピノザによれば、有限な人間精神は十全な認識様式（知性および理性）と非十全な認識様式の二種類の認識様式に関わっており、ほとんどの場合、非十全な認識様式である表象様式 *imaginatio* に拘束されている。事物が表象様式にもとづいて把握される場合には、「偶然」「可能」「有限」「生成消滅」の相で知覚される。それに対して、事物が神の「知性の秩序」にもとづいて把握されるときには、常に「必然」「無限」「永遠」なる相で理解される。したがって、有限精神が神そのものについて、神の理解に即して十全に把握するには、表象様式から離れて、自らも「知性の秩序」に参加する形で把握しなければならない。

しかし果たしてそのようなことが有限な人間精神にとって可能なのか。スピノザによれば、人間精神は神の無限なる本性を「特定のしかた」で表現している神の変状であった<sup>5</sup>。この「特定のしかた」が人間精神の「本質」（自己規定）である。ところで人間精神に変状する限りの神とは、人間精神の本質が現に存在する「人間知性」として、つまり現に存在する有限な個物として、神から産出決定されていることである。その限りにおいて有限な人間精神自身も、神からの知性の産出の秩序の一端を担う形で、知性の秩序に内側から参与しているはずであり、原因としての神について知りうるはずである。第1部公理4で「結果の認識は原因の認識に依存し、原因の認識を含む」と言われていた。神はあらゆる事物の原因であるとするならば、当然、個物についての十全な理解（すなわち有限知性）には、原因としての神についての十全な理解が含まれているはずである。

## 1-3

問題は、人間精神は神や自己について十全に理解する可能性に開かれているのにもかかわらず、日常的にはほとんどの場合、表象様式に支配されているという点である。形而上

学的思考は知性様式に従うことなしに成就することはないが、そのためにも表象様式から知性様式への、いわば「魂の向き変え」が求められる。

スピノザによれば、「自然の共通の秩序」に置かれた場合、表象様式にもとづく知覚は原理的に十全な認識をもちえないという（第2部定理29系）。ここで「自然の共通の秩序」とは、「外部から」決定されずにはいられないという特性のことである。人間が自然物である以上、この特性から免れることはできない。もちろん人間のみならずすべての自然物に「共通」の制約である。この制約のもとでは、事物そのものの本性ではなく、自己が他から受けた「刺激状態」としてのみ事物は知覚される。それゆえ「前提のない結論」（第2部定理28証明）だけが与えられているような状態であり、その知覚は非十全的であらざるを得ない。

ここで言われる「自然の共通の秩序」と理性によって把握される事物の「共通本性」（共通概念）とは、もちろん前者が「外部からの規定」であり後者が「内部からの規定」であるとされているように<sup>6</sup>、対比的に捉えられるわけだが、「自然の共通の秩序」の現場とは別の「場所」で自己と他の「共通性」が存立しているわけではない。その意味で両者の相違は、認識上の相違と捉えられなければならない。表象力や理性といった認識様式から離れて事物それ自体のうちに、様相（偶然と必然）があらかじめ定まっているわけではない。偶然と必然の区別に対応する二つの「世界」が存在するわけではない。あくまで「現実」は唯一である。「自然の共通の秩序」の制約のもとで、表象力を頼って事物を「偶然」として見るか、理性を頼って事物の共通本性を「永遠かつ必然の相」のもとで見ることができるようになるのか。少なくともその実践様式はわれわれの「責任」として、われわれにかかっている。いずれにしても、有限な人間精神にとっての問題は、まずは表象様式とは別の認識様式に移行すること（これは「理性」の導きによる）、そして神の無限本性についての十全な理解を形成することで、自らも「知性の秩序」に参加することである。

#### 1-4

1-2で有限精神も無限なる神について十全な理解をもちうることを見たが、無限なる神について有限精神がもつ理解と、無限なる神自身の自己理解との間に、質的差異を認める必要は全くない。全く同じ「世界」を見ていると言ってよい。「有限知性」のうちに含まれるかぎりでの「無限なる神」、無限知性によって認識活動様式の無限性として表現されるかぎりでの「無限なる神」、これらは「無限なる神」そのものとまったく同格である。まさに神、神の子（有限知性）、聖霊（無限知性）の三位一体形式が、「無限なるもの」について成り立っているといえる。それでも神と神の子ないし聖霊との間に区別があるとすればその差はどこに存するのか。無限の「濃度」の差にあるだろう。実数と自然数に無限における濃度の差があるように。スピノザ的にいえば、人間精神は「延長」と「思考」の二属性に限定されるが、絶対無限なる神は無限数の属性をもつという差である。

ところで人間精神が表象様式にもとづいて知覚する場合には、知性の秩序による理解とは別の「表象世界」が有限精神のうちに現出する。知性はそのような「表象世界」に与らない。したがって、無限知性は有限精神が表象様式において不十分に把握していることがらを、より精度を上げて詳細に把握しているわけではない。無限知性と有限精神との間に

所産的自然についての理解の差があるとするなら、それは「共通本性」の把握の質的差異にあるのではないだろうか。有限精神にとって自然をよりよく理解するとは、自然について「より多くの」共通概念を形成していくことに尽きる。それに対して無限知性にとっての所産的自然の理解とは、「自然法則の統一的理解」<sup>7</sup>とでもいうようなものである。

もちろん有限な人間精神にとっては、現にいま存在している自己自身の本質を立脚点として、神の無限なる本質についての十全な理解を形成していくしかないとは言える。しかしこのことは、理解の出発点としての「自己」「私」を離れることはできないことを意味するわけではない。有限なる「私」が「無限なる神」について十全に理解することは、神の自己理解に等しいのであって、その場合、すべての個物はもはや個性を失いいわば公平無私に「あらゆるもの」として理解されている。そこに「私」の特別性、特権性などはない。しかしまた、われわれは「自己の本質」が無限なる神の本質に由来するものであることを理解するとき、まさに自己の本質が神と個別に結びついていることを実感する。実に、現に存在する有限知性だけが、自己の個性（本質）を理解しているのであって、無限なる神といえども、現に「私」が存在するようになるまでは「私」のことを知らないのである。

## 2. 事物の様相は認識様式に相関的であること

### 2-1

事物は、知性あるいは理性によって十全に理解されるときには「必然」として把握されるが、表象様式にしたがって知覚されるときには「偶然」として把握される。それゆえ、事物の様相はそれがいかなる様式のもとで認識されるかに応じて変わる<sup>8</sup>。ここで、「事物」それ自体は、それが認識されていない場合には様相的に中立なのか、という疑問はスピノザ的には成り立たない。事物がその認識から独立して存在するということは、スピノザの並行論においては存立しえない。神は自らをあらゆる状態で表現するのであり、認識活動もその一つであるから、認識活動を行わない神は、存在しえない神とおなじく矛盾している。もちろん、ここで神の知性と有限精神の表象様式の区別が問題となる。有限な人間精神にとっては、事物の様相は認識様式に相関的に変化しうるわけだが、無限なる神からすれば、そもそも「認識様式に相関的」ということは意味をなさないの言うまでもない。無限なる神は知性的にしか思考しないのだから。そうだとすれば、様相概念の認識相関性は、あくまで有限精神にとってのみ当てはまることである。「必然」が「偶然」との対比で規定される相関概念であるというのであれば、神に対して与えられる様相は、唯一なる「現実」のほうがふさわしいのかもしれない。いうまでもないが、様相は「事物について」言われるのか、事物の「認識について」言われるのかの区別も、神において問題にならない。いわゆる「存在」と「認識」の区別が神において問題になることはない。唯一なる神が同一形式であらゆるものとして表現されるのだから。スピノザにとっては、「同一形式であらゆるものがあらゆるしかたで産出される」ということがまさに唯一なる「現実」であり、この「現実」の外部はあり得ないのであるから、「現実」「真理」「必然」「永遠」などはすべて同一の事態を表現している。現にいま生じていることは、無限なる神にとってどのようなことであれ、真であり必然であり永遠（非時間的）なのである。無限なる神は



形式にしか関わらないのである。

有限精神の表象形式にもとづく立場からは、たとえば現にいま私が論文を書いていることは必然かつ永遠真理だと言われても、それがいったいどういうことなのかピンとこないのは当然かもしれない。ある特定のこの時にこのように行動することが、永遠の昔からすでに宿命として決まっていたのか。別の在り方で行動することは絶対的に不可能だったのだろうか。私の行動が必然的であると言われるにしても、それは先行条件（初期状態）と自然法則から因果必然的に決定されるだけであって、別の可能性を全く受け入れない絶対無条件な意味ではないだろう、と反論が出るかもしれない。しかしスピノザ的には、次のようになる。無限なる神にとって「必然」「永遠真理」とは、事物が具体的にどのような事象として現に生じるのか、個別具体的にその内容をすべてあらかじめ把握していることなどでは決してない。無限なる神の自己理解とは、自らの無限なる力から、あらゆるものがあらゆるしかたで産出されねばならないこと、産出されずに可能性のまま留まるようなものがあるとすれば神の産出力は無限ではなくなってしまうこと、それゆえ現にあらゆるものを産出していること、を産出の現場において理解することである。それゆえ、現に生じていることは、どのようなことであれ、神の絶対無限なる本性からの必然的帰結である。それゆえ論理的必然として永遠真理である。力を出し惜しみするような神など神とは言えない。いかなる事象であれ現に生じていることは、神の無限なる本性を「何らかのしかた」で表現しているものだと考えざるを得ない。この形式自体は、別な在り方がそもそもあり得ないという意味で、論理的必然であるし絶対的必然である。

それにしても、それは神というにはあまりにも論理的すぎないだろうか。あまりにも形式的で血の通わない神ではないだろうか。このような批判が聞こえてきそうである。しかし、『エチカ』の著者であるスピノザにとって、神を「無限なるもの」と定義する限り、そのように考えざるを得ない必然的帰結なのであった。さらに、本論文では取り扱うことはできなかったが、倫理実践的な効果という点においても、神をスピノザ的に理解することから獲得される「最高の至福」は計り知れないものと見ているのであった。

## 2-2

スピノザは「厳密な意味での必然主義者」なのか。それとも、無条件的必然性（論理的必然および形而上学的必然）から条件的必然性（仮定的必然および因果的必然）を区別して、後者に関しては別の可能性（可能世界）の余地を認める「穏健な必然主義者」であるのか。これにどう答えるべきだろうか。その手掛かりになると思われるのは、『エチカ』第2部定理32、定理35、定理36である。

「すべての観念は神に関する限り真である」（定理32）

*Omnes ideae, quatenus ad Deum referuntur, verae sunt.*

「虚偽とは非十全な観念が含む認識の欠如に存する」（定理35）

*Falsitas consistit cognitionis privatione, quam ideae inadaequatae, sive mutilatae, et confusae involvunt.*

「観念は十全であれ非十全であれ、すべて同一の必然性をもって生じる」(定理36)

Ideae inadaequatae, et confusae eadem necessitate consequuntur, ac adaequatae, sive clarae, ac distinctae ideae.

定理32は、「神はすべてを十全に理解する」と言い換えることができる。十全に理解するとは事物を「永遠」「必然」の相のもとに理解することであるから、神はあらゆるものを必然として理解していること、神のうちに「偶然」は存在しないことを言っている。「知性の秩序」から見れば、すべての事物は「必然」以外の様相を取らないということでもある。

定理35は、神の理解は真かつ十全であるほかに、「虚偽」はあくまで有限精神の表象様式にもとづく認識の不完全性に存することを言っている。したがって、定理35も定理32と同様に、神は「知性の秩序」もとづくかぎり。事物を「必然」なるものとして十全に理解していることを言っている。

定理36は、一見矛盾したものと映るかもしれない。「十全な観念」と「非十全な観念」という対立するものが「同一の必然性」に基づくと言われているわけだが、これはいったいどういうことか。次のように補足して言い直してみる。「有限精神にとっては、事物は理性や知性によって全的に理解されることもあるし、表象様式によって非十全に知覚されることもあるが、無限なる神の産出の視点からみれば、事物はすべて同じく、神の絶対的本性から必然的に生じる」。このように言いかえてみると、定理36も実のところ定理32、定理35と同じことを言っていることが分かる。いずれも、無限なる神から見れば、すべては必然的で真で十全なるものであること、偶然性や虚偽や非十全性はあくまで有限精神の認識の不完全性に由来するものであること。その意味で、事物が「偶然」なるものとして、「可能」なるものとして把握されるとすれば、それは表象様式と相関的ではない。『エチカ』第1部定理29が言う通り、「自然のうちには偶然なるものはまったくない」のである。

## 2-3

個物が存在することについての理解もまた、認識様式の区別に相関的に捉えられる。有限精神の表象様式にもとづく限りでは、いわゆる「水平レベル」の相互因果関係として捉えられることになる。その場合、存在を「空間時間的な量」として決定する原因は、先行する他の個物ないし事象である。「どの場所で」「どのタイミングで」「どれくらいの間」事物が存在するかは、事物の本質（事物の何であるか）によって決定されるのではなく、あくまで外部の個物によって決定されなければならない。現に存在する「私」を例にとるなら、私自身が「いつどこで生まれるのか」「生きていくあいだにどのような事態に遭遇するのか」「いつまで生き続けられるのか」などは、私自身の本質を理解することだけでは決定されないだろう。スピノザによれば、事物の本質とは事物固有の活動力能であるから、「私」にとって「できる限りの範囲で身体的に活動すること」は私の本質に属するであろうが、具体的にどのような運動をするかは本質規定のうちに含まれていない。私は常に「できる限りのこと」をしているのであり、実際にどんなことをしようとも、できる範囲内のことを行っているのである。個々の具体的事例は外部との「偶然的接触」によ

てのみ決まる。それゆえ表象様式にもとづいて判断されるなら、「私」が現にいま存在することは偶然なることとしてしか知覚されない。

他方、神の視点から「知性の秩序」にもとづいて、個物が現にいま存在することを説明するとすればどのようなものとなるだろうか。その場合には、存在は「空間時間的な量」としてではなく、「存在へのこだわり」として理解されることになる<sup>9</sup>。なぜ個物は、現にいま自ら存在し続けようとしてこだわるのか。その原因は外部の個物によるのではない。「私」を生んだ両親は「私」の誕生の原因であるにしても「私」が存続し続ける原因ではあるまい。「私」の外部の諸事物は私自身の「存在へのこだわり」を手助けするかもしれないし邪魔をするかもしれない。「存在へのこだわり」じたいが、外部からの影響に対する反応(抵抗)を産み出すのであって、外部からの影響が「存在へのこだわり」を産み出すわけではない。かといって、「私自身の本質」が「存在へのこだわり」の原因でもない。個物は自己自身の力によって自己自身を産出しているのではないのだから。自己自身の力によって存在するのは実体としての神のみである。スピノザに即していえば「個物の本質には存在が含まれない」のである。

結局のところ、個物の「存在へのこだわり」の原因は、実体としての神でしかないということになる。「神はあらゆる事物の存在の原因である」と言われるとき、まさにこのことが言われているのである。無限なる神の立場から見たとき、神はあらゆるものの「存在」と「本質」の原因なのである。それゆえ次のような対立図式にもとづく解釈は、無限の立場と有限な立場との区別を無視した誤解である。「個物の本質を産出するのは神であり、神からいわば垂直的に産出されるのに対して、個物の存在は、外部の有限的個物からいわば水平的に産出される」という解釈は、少なくとも『エチカ』が無限なる神の視点から述べられているとすれば採用することはできない。神からの産出決定は、本質であれ存在であれ、本性の必然性による一義的産出決定なのである<sup>10</sup>。

## 2-4

以上を踏まえれば、スピノザは厳密な意味での必然主義者かどうかという疑問に答えることができる。『エチカ』が神の「知性の秩序」にもとづいて展開されていると見る限り、事物は必然の相以外において理解されることはできない。その意味では厳密な意味での必然主義の立場に立っていると云わざるを得ない。そもそも、必然性を「無条件的」「条件的」の二種類に区別することじたいが、無限なる神の立場からすれば意味をもたないはずだ。まして、「可能世界」なる着想じたいが表象様式の産物だといえるだろう。スピノザ研究者の間ではおなじみの、「垂直的因果」と「水平的因果」の区別にしても、そのような区別は無限なる神のうちにあるはずがない。神からの無限様態の産出系列と有限様態相互の産出系列が、スピノザの一元論的体系においてどのように整合的に位置づけられるのかという解釈上の争点についても、スピノザ自身の眼からすれば、そもそもの外れで無意味な論争と映るかもしれない。

そもそも「知性の秩序」にしたがうかぎり、系列の区別など最初から存在しない。というよりスピノザ自身は、知性を洗練して表象様式から知性的秩序へと移行することを目指していた。表象様式に依存するかぎり、自然そのもののうちに「偶然性」があると虚構し



てしまう。知性の秩序へと魂の向きを変えるとき、あらゆる事物が唯一なる神の様態として、等しく存在を享受していること、神から等しく祝福されていること、が直観されるのであった。実のところ、このような直観をもつこと自体が、無限なる神の存在そのものを証しているのである。

### 3. 無限なる神は「知性の秩序」においてどのように理解しているのか

#### 3-1

「いかなる他の秩序でも神から産出されることができなかった」（第1部定理33）をどのように理解すればよいだろうか。

やや極端な言い回しであえて表現するなら、すべてを永遠の相のもとに理解している神から見れば、産出されるあらゆる事物が各々どのような順番で産出されるか、その時間的順序系列などそもそも問題にならない。神から見れば、あらゆる事物が産出される。具体的にどのようなものがいつ産出されるのか、という疑問も有限精神の表象の立場からの疑問であろう。神からすれば、存在しうるすべてのものがあらゆる仕方で産出される、としか言いようがない。産出されずに可能性のまま留まることはあり得ないのであるから。神からすべてのものが産出されることと、神がすべてのものを理解していることとは、事態として全く同一なのであるから、神はすべてを十全に理解しないわけにはいかない。表象様式の立場からすれば、「すべてのもの」について考えるとは、そのうちに含まれるものをすべて数え上げて合算するという形になるだろう。しかし無限なる神の知性様式においては、唯一の絶対本性を「あらゆるしかたで」表現する様態として、生成の順序などとは無関係にいわば同時に、あらゆるものが「無限」なるものとして捉えられているのであろう。

表象様式の立場からは、たとえば「盗みを犯すというしかた」「病気に罹るというしかた」なども神が産出する「あらゆるしかた」に含まれるとすれば、それらは神の本性をどのようなしかたで表現しているのか、と言いたくなるかもしれない。神はそのようなネガティブなしかたで表現されないのではないのか。「あらゆるしかた」は、自然法則的なものに限定されるのか、それとも個体レベルの諸事象までも含んでいるのか、といった疑問も湧いてくるかもしれない。ここでもまた、これらの疑問に対して「知性の秩序」から答えるとすれば、神の唯一絶対無限なる本性を表現しうる「あらゆるしかた」だと繰り返すしかない。

神にとっての関心事は、一つ一つを具体的にどのようなしかたで産出するかではなく、無限に豊かな唯一なる神の活動力を、表現しうる限りの「あらゆるしかた」で、現に産出することである。ポイントは、神の無限なる力を表現するのにふさわしい形容語句は、「無限なる多様性」「無限なる質的豊富さ」であるという点である。「無限性」それじたいをどのように表現するかという点である。無限そのものの理解に、そこに含まれる個々の事物についての個別的理解が必要なわけではあるまい。その意味でも、第1部定理33で言われる「現にある秩序」は、必ずしも特定のありかた、特定の法則性に限定して理解される必要はない。というより限定して理解されてはならない。その場合、神はなぜ多くの可能性のなかから「これ」を選んだのか、といった問いになってしまう。神の「目的」や「意図」

を問うことになってしまう。必然主義が宿命論になってしまう。したがって「現にある秩序」とは、「あらゆるものがあらゆるしかたで産出される」という現実の形式、唯一なる現実の存在そのもの、として理解されるべきであろう。

とはいつてもまだ納得がいかないだろうか。有限精神の表象様式の立場からすれば、原因としての「かくかくしかじかの事象」が因果必然的に「かくかくしかじかの事象」を産出決定する、その個別の決定論的メカニズムこそが問題であると思われるのに、一気に一なる実体を表現するいわば「関係の全体性」のごときものを持ち出されてしまったら、「何でもあり」と感じるのも否めない。しかしスピノザ形而上学の絶対必然主義の立場からすれば、無限なる神はあらゆるものを「唯一なる相」のもとでしか理解しないのである。現出するあらゆるものは、すべて「唯一なる神」の変状として見られる限り、いかなる事物いかなる事象いかなる法則性であれ、必然的に神から「本質」と「存在」へと決定されているのであった。

ここに至ってもなお、次のような素朴な疑問をもつかもしいない。当然のように「無限なる神の立場に立てば」と言っているが、有限精神は有限である限り、そもそも神の視点に立つことなど不可能なのではないのか。有限と無限の絶対的断絶を強調する態場からは、スピノザの主張は全く受け入れがたいものに映るに違いない。先述の繰り返しになるが、人間知性は、思考属性において人間精神の本質に変状したかぎりの、神そのものなのであった。それゆえ神そのものの十全な理解を形成しうるのであった。ところで事物の十全な理解とは、事物をその原因の力のみによって理解することである<sup>11</sup>。神の場合は、神を自己原因として理解することである。自己原因としての神を理解することは、結局のところ神の側から考えることであろう。日常言語の慣例では「人間精神が考える」と表記されるが、スピノザにとって人間精神はあくまで神の変状にすぎないのであるから、思考の主体はあくまで実体としての神である。ここでもわれわれは表象様式にもとづく日常言語の統語法に支配されているのであろう。

### 3-2

実のところ、神は「あらゆるものを理解している」といつても、あたかも俯瞰的に事物の因果系列を一瞬のうちに見てとっているといったものではない。そのような描像はあくまで有限精神の表象様式にもとづくものであろう。因果系列の外部に因果系列の創設者を立ててしまうことになる。また、「一なる神からの流出」として神の産出を言い表すとしても、神を流出に先立つ一者、現に流出される事物を自身のうちに潜在的本質として含みもつ一者、と解するわけにはいかない。神は頭の中にある自らの産出プランをあらかじめ見てとっているわけではない。また無限知性といつても、有限知性の各々すべてをいわば包括的に見てとっているわけではない。事物は有限的な個物として現に存在するようになってはじめて、その本質も他から区別されるようになる<sup>12</sup>。それに対して無限なる神においては、個物相互の差異や区別などは問題にならないのである。無限なる神は、あらゆるものを同格にすべて、自身の唯一なる活動を無限に多様なしかたで表現するものとして理解するのみである。

有限知性という言い方も、それが「有限」であるのは、産出された他の（外部の）有限

知性との相対的比較によって自らが規定される場合である<sup>13</sup>。共通本性や共通概念ではなくあくまで「個物の有限性」については、有限的事物の側からでないと言えないと思われる。それゆえ表象形式の影響を免れないというべきだろう。しかし「理性」を通じて無限なる神の十全な理解を形成することはできるのであった。そのときには自己はもはや「有限な個物」として見られているのではない。人間知性が無限知性の一部をなすといわれる場合にも、「無限」に空間的意味での「部分」はないとすれば、無限な神のうちに含まれる個物はもはや文字通りの意味での「個物」「有限」とは言えないであろう。

### 3-3

それにしても「神」の何であるかはいつの世でも誤解され続けてきた。その一因は、われわれの日常的思考が事物を表象様式にしたがって知覚することに慣れ親しんでいるところにある。その限りにおいて神はまさに人間に似たものとして擬人化されて捉えられる。表象様式の特徴は、事物を「現前するもの」として、「具体的表象像」として思い描くという点にある。それゆえ神は、それが存在するかぎりは、たとえ直接的には目に見えなくとも、何らかの形をもったものとして、想像を超えたパワーをもってわれわれに影響を与える何かとして、イメージされる。もちろん人間と同じように、神も何かを理解し意志する。喜怒哀楽ももつ。神の隠された意図を解き明かすことが神学の課題でもあった。逆に無神論者が、「どこに」「どのような姿で」存在するかを観察可能な仕方で示されないと神の存在など単なる虚構だといって神の存在を否定するときにも、神の概念は同種のものとしてイメージされている。

しかし知性の立場からすれば、神を神によって産出されるものから実在的に区別されるものとして理解することはできない。無限なる神は常に有限的個物の産出の現場にあって、個物の「存在」と「本質」の原因として居合わせている。神を個物各々の「外部」に想定してはならない。個物の「本質」のうちに神の無限なる本質が含まれているのだから。それゆえ、「表象様式」から「知性の秩序」への移行、「有限」から「無限」への移行、といっても、移行の前後で存在論的身分が変化するわけではない。存在としては「有限な個物」のまま、共通概念である「理性」を頼りに、「知性の秩序」をいわば「目覚めさせる」ことがまさに「魂の向きかえ」なのである。

あらゆるものが、あらゆるしかたで、現にいま産出されていること、そのこと自体がまさに、神が活動していることであり存在していることなのである。それは「現実」を言いかえただけのことではないのか。まさにその通りである。現実の外部はあり得ないこと、現実是唯一であることを『エチカ』は論証しているのである。もっとも、無限なることがらが無限なるしかたで産出されている、その現場としてのみ「現実」を理解するかぎりにおいてだが。

### おわりに

「人間は神の変状である」を、自然への畏敬の念を表現するフレーズとして道徳教育などで使われることも多い「人間は大いなる自然によって生かされている」という意味で捉

えるとしても、問題は自然と人間の関係がどのように理解されているのかにある。少なくともパスカルが『パンセ』のなかで記しているように解するのはスピノザ的ではない。パスカルは、無限なる宇宙において人間がいかに無に等しい存在であるか人間存在の卑小性を強調している。また、なぜ私は現にいま存在しているのかの「根拠の無さ」としての絶対的偶然性を強調している。これに対してスピノザが『エチカ』で最終的な結論として説くのは、神のうちにある自己が、一なるものへの没入などではなく、個性あるものとして、しかと存在していることの実感である。これがまさに「第三種の認識」とスピノザが名づける直観認識である。それは自己を神から産出される「あらゆるもの」の一つとして一般的に捉えるだけでなく、神からの産出をまさに自己自身と神の個別の関係としても直観するものである。そこから、「存在しうる限りの最高の精神の満足が生じる」(第5部定理32証明)のであった。

論文の締めくくりとして、『エチカ』第5部定理40備考からの引用と、作家の辻井喬が『古寺巡礼』<sup>14</sup>のなかで書いていたことを紹介しておきたい。

「われわれの精神は知性的に認識するかぎり思考の永遠なる様態であり、これは思考の他の永遠なる様態によって決定され、後者はさらに他のものによって決定され、こうして無限に進み、このようにしてこれらすべての様態は合して神の永遠無限なる知性を構成する」。

「仏像を眺めるといのは、どういうことなのだろう。(中略) 宇宙空間にひとりで立っている自分を感じるのだ。しかし、その自分は決して軽くも小さくもない。あえて言えばしっかりと仏に繋がれていることによって小さいけれども確固とした存在になっている感じを否定できない。僕は本当の深さ、大きさというものはそれを見る者に自らの小ささを感じさせないのではないかと気付いた。通念に安易に寄り掛かって、仏を見ていて卑小な自分を感じた、というふうに表示してしまう場合が多いが、それは仏との対比で小さいのではなく、それまでの自分と、仏に接した後の自分を比較しているだけのことなのではないかと思う。」

## 註

- <sup>1</sup> たとえば上野修は、スピノザは「因果的決定論」より強い「必然主義」をとっているとしている。上野修「必然、永遠、そして現実性—スピノザの必然主義」『スピノザーナ』第6号2005, p.6
- <sup>2</sup> そのような解釈の代表例として、カーリーによる議論がある。Edwin Curley and Gregory Walski, "Spinoza's Necessitarianism Reconsidered" in *New Essays on the Rationalists*, ed. Rocco J. Gennaro, Charles Huenemann, Oxford. U. P. 1999, pp.241-262 カーリーはスピノザの必然主義を「厳密な意味での必然主義」と捉えるギャレットを仮想敵として、有限的個物の存在に関わる因果関係については、スピノザは可能世界の余地を認めているとする。カーリーの「穏健な必然主義」路線に賛同する議論として、神の無限知性からは無限なるものしか帰結しないかぎり、有限的個物についてスピノザは厳密な意味での必然主義を採用していないとするマーチンの議論もある。



Christopher Martin “A New Challenge to the Necessitarian Reading of Spinoza” in *Oxford Studies in Early Modern Philosophy*, volume V, Oxford. U. P. 2010, pp.25-70

なおギャレットは、有限的事物の「因果系列の総体」は無限様態として神から必然的に産出されるとして、そのかぎり「別の系列の可能性」をスピノザは認めていないのだと捉える。後述するように、スピノザが言う「現にある秩序」とは特定の秩序というよりは「神からあらゆるものがあらゆるしかたで産出されている」という、「現実」が必然的にもたずにはいられない本性のことだとするなら、「系列の総体」云々はスピノザの念頭にはないと言えるだろう。Don Garrett, “Spinoza’s Necessitarianism” in *God and Nature Spinoza’s Metaphysics*, ed. Yirmiyahu Yovel, Brill, 1991, pp.191-218

- 3 「観念は事物の表象像や言葉に存しない」「言葉および表象像の本性は思考の概念を全く含まない単なる身体的運動にもとづく」（第2部定理49備考）
- 4 因果性も共通概念（共通本性）と解すべきであろう。因果性の十全な理解とは「原因なくして事物は存在しない」ことの普遍的理解である。個々の事物についての情報とは独立に、いわば先行的に知られるものである。カント的にいえば経験に先立つカテゴリーということになる。スピノザ的には理性による共通概念である。共通概念は事物の「普遍性」「一般性」の理解に限定される。それゆえ決して「個物の本質」を説明しない（第2部定理44系2）。ここから帰結することは、自然科学はあくまで「理性的」探究に限定されるかぎり「個物の本質」には関わらないということである。
- 5 「個物は神の属性の変状、すなわち神の属性を特定のしかたで表現する様態にはかならない」（第1部定理25系）
- 6 「外部から決定されて、すなわち事物との偶然的接触にもとづいて」事物を把握する場合と、「内部から決定されて、すなわち多くの事物を同時に把握することによって事物の一致点、相違点、反対点を認識する」場合とが、第2部定理29備考で対比的に描かれている。
- 7 スピノザが間接無限様態の例としてあげている「無限のしかたで変化しながらも常に同一にとどまる全宇宙の姿」（シユラー宛書簡）とは、そのような自然法則の統一性のことを指すのであろう。
- 8 様相概念が認識様式に相関的であることを強調するのはニューランズである。そのかぎりにおいて本論文のスタンスと全く同じである。しかしニューランズによれば、有限の個物は、それ自身孤立的に「狭い視点」から捉えられるのではなく、「水平系列」のネットワーク内部に位置付けられて「広い視点」から見られたときにのみ、その存在が「必然」であると捉えられるとしている。しかし、スピノザが「神は個物の存在の必然的原因だ」と言うとき、その必然性は水平的系列の次元で捉えられていない。ニューランズの「狭い視点」「広い視点」という区別の問題があるだろう。Samuel Newlands, *Reconceiving Spinoza*, Oxford. U. P. 2018, ch. 4, pp.90-111
- 9 第2部定理45証明で「現実存在する個物の観念はその個物の本質と存在を必然的に含んでいる」と述べたのを補足する形で、ここで言われる「存在」とは「神のなかに存するかぎりにおける個物の存在そのもの」であり、「各個物が存在に固執する力はやはり神の本性の永遠なる必然性から生ずる」のだとスピノザは言っている。第1部



定理24系でも、「神は事物が存在し始める原因であるばかりでなく、事物が存在することに固執する原因でもある」と言われている。また同じく第2部定理45備考で、「存在に固執する力」は「抽象的にいわば一種の量として考えられる限りの存在」すなわち「持続的存在」から区別されなければならないことを強調している。

<sup>10</sup> ヒュネマンはスピノザ形而上学が一元的体系であることを重視して、スピノザの必然主義を多重決定論的必然主義と解釈している。事物は同時に、神によっていわば横からと、他の個物によっていわば横からと、二重に決定されているというわけである。しかしヒュネマンは認識様式の相関性について全く触れていない。事物が多重に決定されるのは、有限精神の表象様式にもとづいて事物が見られる場合にすぎないのではないか。スピノザの一元論的体系があくまで神の唯一性にもとづくとするなら、多重決定論とスピノザの一元論とは整合しないのではないか。Charles Huenemann, “The Necessity of Finite Modes and Geometrical Containment in Spinoza’s Metaphysics” in *New Essays on the Rationalists*, eds. Rocco, J. Gennaro, Charles Huenemann, Oxford, U. P. 1999, pp.224-240

<sup>11</sup> 「ある原因の結果がその原因だけで明晰判明に知られる場合、この原因は十全な原因であるといわれる。」(第3部定義1)

<sup>12</sup> 事物の「形相的本質 *essentia formalis*」と「現実的本質 *essentia actualis*」の区別について簡単に触れておく。スピノザによれば事物の「形相的本質」は、「属性」に「含まれる *comprehendere*」かぎりでの「本質」(自己規定)である。それに対して、事物が現に持続的に存在するようになったとき、個々の事物は「現実的本質」として現出するが、それは「自己自身(自己規定)への固執(欲望)」「自己が自己であることへのこだわり(衝動)」として知覚される。もちろん永遠真理としての本質は「自己規定(何であるか)」であって、「こだわり」「衝動」そのものではない。「自己自身」に対する「こだわり」として、「形相的本質」が現に「現実的本質」として表出されるということである。

<sup>13</sup> 様態が他の様態から区別されるのは「現実に存在するかぎり」であり、属性のうちにはそもそも区別は存しないことを説得力をもって示している論文として柏葉武秀「存在しないものの存在論－スピノザにおける精神の永遠性をめぐる一つの論点－」(『スピノザーナ』第10号2009/2010, pp.35-53)がある。

<sup>14</sup> 辻井喬『古寺巡礼』(ハルキ文庫2011, pp.10-11)

(2021年9月22日受理)